
ボーカロイドの日常

ぷらむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボーカロイドの日常

【Nコード】

N7271Y

【作者名】

ぶらむ

【あらすじ】

皆大好き、歌って踊るボーカロイド。

でも、彼女たちは、どんな生活をしているのかな？

これは、その謎を面白おかしく解き明かす小説です。

作者が好きな曲の歌詞とかも紹介していくから…

初音ミク「よろしくね！」

自己紹介（前書き）

ちよつとKAITOが
残念なことになっています。

自己紹介

ミ「どうも初めまして！初音ミクです。よろしくね！」

リ「鏡音リンと！」

レ「鏡音レン！」

ル「巡音ルカ…です」

M「MEIKOです。よろしく」

K「KAITOです！好きな物はいし」GUMIです」

ミ「この小説はミクたちの日常をサッと書いたようなノリで進みます！」

レ「ナレーターも入るからね。今回は入らないけど」

G「作者は結構、命削ってるみたい」

リ「これからキャラも増えると思うから、皆、どうか見て行ってね！」

ミ「じゃあ、今日は自己紹介だけだけど、みんな…」

全員「よろしくね！」

嗚呼、素晴らしきニャン生（前書き）

初めての歌詞付き小説です！

楽しんでくれたら幸いです。

あと、長いです。

嗚呼、素晴らしきニャン生

リ「かわいいいいいい？」

？「にゃあーん」

リンの声と、何かの鳴き声があるとある部屋に、響きます。

レ「リンく？ミク姉がおつかい行ってきてって言ってただけけど…
何それ…？」

リ「レン！酷いな、何それなんて。見ればわかるでしょ？猫だよ」
レ「いや…それは分かるんだけど…」

お決まりの会話が繰り広げられます。レンくん、お疲れ様。
そこに、我らがGUMIが現れました。

G「レンくん。ミクさんがおつかい行ってきてだって…」

レ「ほらあ！僕に白羽の矢が立つちゃったじゃないか！」

まあ、どうせネギなんだろうけど！と言う毒舌レンくん。

G「…猫？」

猫「にゃーん」

リ「うん。猫だよ（キリッ）」

レ「開き直らないで！」

ミ「リン、レン？ちよつと加賀ネギと曲がりネギと下仁田ネギと九
条ネギとやつこネギとチャイブとアサツキとワケネギと千住ネギと
リーキと九条細ネギと谷田部ネギと観音ネギ買ってきてくれない？」
レ&リ「ミク姉やめて…！」

お決まりのパターン2 来ました。そして、レンくんの予想大当たり。

G「なんで猫がいるの？」

一人冷静なGUMI。流石です。

リ「あゝ…可愛いでしょ」

レ「誤魔化さないで！」

レンくんはこのあと、布団にこもって熟睡したそう。

リ「家の前にいたの。可愛かったから連れてきちゃった」

レ「連れてきちゃった ってあのna…」「可愛いよねー！！GUM

Iちゃんもそう思うでしょ？」

G「うん…可愛い」

リ「なんか癒されるよね！」

レ「はあ…まあ、確かにな」

ミ「かわいいー？」

ほのぼのとした空気が、広がります。

そして、ミクが言いました。

ミ「ねえ！『嗚呼、素晴らしきニャン生』歌ってよ！私、あの曲好きなんだ」

リ「あっ！リンもリンも！ききたい！」

リンも乗ります。どしどし乗ります。

二人は戸惑うと思われました。が…

G「久しぶりに、いいんじゃない？」

レ「え？ああ…うん。一応、僕らは歌うのが仕事だし」

M「いいじゃない！ききたいわ」

K「俺も！」

ル「私も…」

いつの間にかMEIKOとKAITOとルカがいました。
三人も、きく気満々のようです。

G「じゃあ…」

レ「いくか」

嗚呼、素晴らしきニヤン生

これは可愛いお嬢さん

真っ白な毛がとても素敵ね

こんな月が綺麗な夜は

僕と一緒に遊びませんか

ニヤン生は一度きり

楽しむが勝ちなのです

あなたを縛る首輪は

噛み千切ってあげましょう

野良は最高

ニヤンニヤンニヤン

魚くすねて ハト追いかけて

昼間は働く人間を

尻目に屋根の上で夢うつつ

あなたも自由に

ニャンニャンニャン

素敵な仲間も紹介しましょう

さあ、その窓を開いて

飛び出すのです！

これは気ままな野良猫さん

闇の中目だけが光ってる

ずいぶん口が上手だけど

私はバカな女じゃないわ

ニャン生は一度きり

だからこそ飼われるのよ

ブランド首輪の価値が

あなたには分かるかしら？

私は優雅よニャンニャンニャン

美味しい食事にふかふかベット

水はちよっぴり苦手だけど

毎日シャワーだって浴びれるの

それに比べてニャンニャンニャン

あなたは誰に守ってもらうの？

明日車に轢かれるかも

知れないじゃない！

そんな強気な

ところも素敵です

一層あなたを
好きになりました

あら正直ね
でもそんなやり方じゃ、
ココロ揺らないわ

僕の夢はニャンニャンニャン
いつかはこの街を飛び出して
はるか北の国に旅して
オーロラをこの目で見ることです

そこにあなたがニャンニャンニャン
居てくれたらなんて素敵でしょう
だけどそれは叶わないらしい…

生き方はニャンニャンニャン
そう簡単には変えられないの
それに私を飼っている
女の子を一人にできないわ

話の途中よニャンニャンニャン
あらもう行つちやうの？
ねえ、ちよつと！
明日もここに来ていいのよ
待ってるから…

ぱちぱちぱち……
お疲れ様、レンくん。

お疲れ様、GUMIちゃん。
お疲れ様、私。

レ「ふう…」

G「どうだったかしら？」

リ「お疲れ二人とも！よかったよ？」

M「ええ、よかったわよ」

K「うんうん」

ル「良かったですよ。お疲れ様でした」

ミ「このミクさんが太鼓判を押してあげるよ！」

あれ、みんな？

作者の努力にはノーコメントですか？

まあ、いいとしましょう。

それではみなさん、

全員「また、会えますように！」

ああ！決めゼリフを奪われた！

嗚呼、素晴らしきニャン生（後書き）

長くてすいませんでした！

また次回も見てくださいたら幸いです。

トーク・みんなが警察官だったら…(前書き)

今回は歌詞ナシです。

そこを踏まえてお楽しみください。

トーク・みんなが警察官だったら…

始まりは、ルカが何気なく呟いた言葉だった…。

ル「…思ったんですけど、ミクさんが警察官だったらどうなっていたのでしょうか？」

レ「ええ？（笑）なにいきなり」

ル「いや、ふと…すみません。忘れてください」

リ「いやいや、面白い発想じゃない？」

K「そうだよ。隠すことないよ？」

M「…あんだ、そういういいこと言うキャラだったけ？」

G「でも、確かに気になりますね」

みんなで喋ってるときに、後ろから近づく影…。

みんな！気付いて！気付いて！

ミ「なーに、みんなして話してるの？いれてよ！」

レ「わあっ！なんだ…びっくりした。ミク姉か」

リ「今、ミク姉が警察官だったらどうなってたんだろって、皆で話してたの！」

ミ「ふ〜ん…楽しそうだね！まあ、とりあえず感謝状は100枚越えだろうな…」

全員「……………」

楽しそうに妄想…いや、想像を膨らましてるミクに、みんなは黙るしかありませんでした。
やさしいね。みんなは。

レ「んまあ、世界一ネギ臭い署として、ギネスブックにはのるだろうね。」

リ「あははっ！ありそうっ！」

ミ「レンひどい！」

M「じゃあ、レンだったらどうなってるかしら？」

レ「レンの場合」

ル「レンくんは真面目だから、きっと、給料はいいですよね」

ミ「レンは貯金するタイプだから貯めて貯めて、家を買おうだよね」

レ「当然だね」

レンくんは何事にも一生懸命ですよね！

リ「顔もいいから、何度かプロポーズされそ」

G「それで、頭脳明晰、容姿端麗の方と結婚し、幸せな家庭を築くのですね」

K「最高だね」

レ「リンの場合」

レ「突撃形だから、事件に積極的に取り組みそうだね」

G「たしかに」

ル「分かるような気がします」

ミ「それで、運動神経が良いから、犯人を多く捕まえそう！」

M「でも、演技ヘタだから、囿捜査は無理よね」

リンちゃん、痛いところを突かれてしかめっ面です。

K「でも、上司に気に入られそうだね」
M「そうね」

↳ GUMIの場合↳

K「とりあえず、上司のお気に入りに入るよね」

M「そうね。真面目なもの」

G「……／／／」

GUMIちゃん、照れてます。
可愛いです。

リ「GUMIちゃん、恋愛に興味ナシって感じしない？」

ミ「ああ、仕事に生きるかも……」

レ「でも、リンとは対照的に、囲捜査が得意そうだよね」

ル「感情を表に出さないタイプですものね」

G「…それ、喜んでいいんでしょうか…？」

↳ MEIKOの場合↳

リ「MEIKO姉、給料全部お酒に使いそう……」

全員「……確かに……」

M「ちょっと、酷いわね！」

顔が真っ赤です。

凶星だったみたいですね。

↳ KAITOの場合↳

レ「アイスだね」

全員「うんづん」

K「みんな、酷い！（泣）めーちゃんまで…」

M「だって、事実じゃない」

MEIKO姐さん、毒舌ですな。

まあ、みんなもいろいろ楽しんでくれてよかったです。

画面の向こうのあなたが楽しんでくれたかどうかは分かりませんが、
では、また4話目で会えますように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7271y/>

ボーカロイドの日常

2011年12月1日16時47分発行